

ポラリスを仰ぐ北の大地から

桜

寿都医師会 会長 秀毛 寛己

わが病院の外来から庭の桜をみるのを楽しみにしている。

今年も例年より早かったが貴婦人のごとく美しく咲いてくれた。

エゾヤマザクラなのか本州のソメイヨシノより淡く花卉もやや小さめだ。雪と氷の長い冬を耐え咲いてくれたと思えば京都八坂神社、御室仁和寺、生田川布引、夙川堰堤、大阪造幣局の通り抜けの桜に勝るとも劣らず感無量である。

桜をみればこの二句をいつも思い出す。

‘風誘う 花よりもなお 我はまた
春の名残を いかにとやせん’

‘願わくは 花の下にて 春しなむ
その如月の 望月の頃’

どちらも命のあわれさを花の散る光景で可視化した有名な歌である。

どういうわけか子どものころには桜は弁当に落ちてくる毛虫と蛾が沢山いる樹木という認識しかなく、進学的气ぜわしさの中で花を愛でるなどと悠長なことは記憶が無い。だいたいそれも入学式に雨で無残に散ったような想い出しかない。ところが年を経るにつれなぜか桜が待ち遠しく花の美しさをより感じるようになるというのはある脳科学者もいっていたが至言である。一期一会…命を重ねて観てしまうからかもしれない。

散ってしまえば何となく寂しいが最近、桜は実は4度、その見ごろが有ると思うようになった。蕾が陽光に輝く開花期の4月、目に鮮やかな黄緑色の軟らかな葉をまとう新緑期の6月、そして輝くような黄金色に葉が変化する紅葉期（北海道では黄葉期）の10月、最後にすべての葉を潔いまでに落とし枯れた幹と枝だけになり孤高として水墨画のように雪化粧に映える寒冷期1月。桜は4度咲くと思うようになった。

桜は日本のカレンダーツリー。昔から人の世に移りゆくはかない時間をその変化する美しさのなかに体現させて教えてくれていた記憶の時間の木。新年度を迎え、桜に負けずメリハリをつけてまた心新たにこの一年を頑張ろうと思う。

DV（家庭内暴力）

羊蹄医師会 会長 皆川 幸範

先日留置所の検診に行った時知っている男がいた。2ヵ月ほど前受診した30代の男でスノーボードのインストラクターをやっていてボードのエッジで左大腿部に深い切創を受傷し、他院で治療を受けていたが2週間たっても抜糸できず、傷から出血していたのを治療したので覚えていたのである。検診は傷の具合も体調も悪くないので異常なく終了した。後で聞いたところ、酒を飲んでは何回も奥さんに暴力を振るっていたようで、今回は奥さんが危険を感じて警察に相談して留置されることになったようだ。診察の時は夫婦2人で仲良く来ていたように見えたが、分からないものである。

以前には20代後半の奥さんがサングラスをかけて受診したことがある。左眼窩は打たれたボクサーのようで、腰背部大腿には青アザが新旧多数見られた。この2人は後日離婚し裁判になった。

また別の30代女性は再婚だったが、男の暴力が自分だけでなく娘に及びはじめたため、警察と相談し離婚に踏み切った。最初の離婚もDVが原因だったというからなんとも気の毒だ。

もう一件は一卵性双生児の兄弟で、不思議と同じところに怪我をしたり、同じようなところの粉瘤が化膿しては受診するのだが、今でも兄弟どちらかは区別がつかない。そんな双子だが唯一アルコールだけは弟は飲めないが、兄は酔っては奥さんに手を挙げるがあった。親子全員で土建業をしている家族なので一度皆で話すようにしたところ、暴力はなくなったというから話し合える環境が大切と思われた。

こうして見るとDVは結構身近な問題と感じられた。インターネットの小児へのDVの問題では、胸腹部XPで多数の肋骨骨折の跡が見られた。一歩間違えば死に至ることもあり躰かDVか難しいが、小児へのDVにあまり注意していなかった気がする。なのでこれからは注意したいと思う。

